
演劇 I F ストーリー 赤い花を咲かせる木

きらきら星

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

演劇IFストーリー 赤い花を咲かせる木

【Nコード】

N2147D

【作者名】

きらきら星

【あらすじ】

最後の純粋なヴァンパイアの血を受け継いだ少女。彼女の終わりのない人生のほんの一時、彼女が少し変わったその一日のお話。

(前書き)

カナカナと鳴く虫のアニメを見て無性にこんな話を書きたくなりました。

なお、今回の二人は同姓同名ですが性格の設定はまったく本家とは関係ありません。

私の両手には命がある。

暖かくて、赤くて、血生臭い。

握れば音を立てて潰れる。

さっきまで脈打っていたそれに食らいつく。

噛み千切ると血が噴出す。

言っではいけない。言っちゃいけない。

そんなこと言ったらこれに失礼だ。

でも、……………

美味しい。

私の中で何か吹っ切れた。

私は夢中でそれを食べた。

手の中のがなくなると目の前のそれから穿り出して食べ続けた。

手や顔が血だらけになっても気にならなかった。

指に付いた血を舐めた。

舌を刺激するしよっぱさが私を興奮させる。

頬についた血を集めそれを舐めと自然と甘い吐息が漏れた。

「美味しかったよ。ありがとうね」

顔以外原形をとどめていないそれを突きながらお礼を言った。

これで一日まだ私でいられる。

私のことをヴァンパイアと思わないでください。

その辺のなんちゃってヴァンパイアとは違うんだから。

世界で一人の純粋なヴァンパイアなの。

力も能力もその辺のとは桁違いにある。

「ただ、それ以上に生きていくのがその辺のと比べると何倍も大変。」

「何より大変なのは食事ね。」

「その辺のヴァンパイアは血だけ吸ってれば満足とか言ってるけど私はあなたみたいになるまで食べないと満たされないの。」

「それも毎日、最低一人。」

「だから、ありがとうね。」

「あれ一つが入る穴を掘りながらあれに何故そうなったのか教えてあげた。」

「実は、あれはまだ生きているのだ。」

「私に噛まれて脳が無傷だと永遠に生きていられるらしい。なんと酷い能力を受け継いだんだ私は。」

「それじゃあ、おやすみ」

「穴にその頭と骨を放り込み土をかける。」

「あつ、思い出した。」

「ごめんねえ。まだ生きてるんだよね」

「脅えた目が私を見ている。」

「目と鼻を使って必死に恐怖を表現するそれは滑稽だった。」

「人差し指と中指と親指の三本をその左目に近づけた。」

「指は細くガラスのような鋭い爪が伸びている。」

「左目周りの骨を砕き目玉ごと脳を取り出した。」

「おやすみ」

「目玉をしゃぶりながら苗木を植えた。」

「この国の有名な花らしいのねこれ。春になると綺麗な花が咲くんだった」

「公園を出た私は誰もいない真夜中の学校の屋上に座っていた。」

名残惜しそうに最後までしゃぶっていたあれを噛み砕いたのは10分前。
そろそろ来る。

来た。

私は激しい吐き気と頭痛に襲われた。

「う、うぐう、おええ」

食べた物を全部出した。

すごい有様だ。

人間が潰された後みたいでありとあらゆるものが目の前に広がった。

苦しい、気持ち悪い、もうこんなの嫌だ。

食べて幸せでいられるのはほんの少しの間だけ。

幸せの後に来るのは激しい苦しみと後悔だけ。

「もう嫌だ。このまま死のう」

校舎裏で見つけたガラスの欠片を自分の心臓に突き刺した。

血が一杯出た。

それでも死ねない。

やっぱりだ。脳を潰さないと死ねないんだ。

いいよね。そこら辺のヴァンパイアは。

普通の真似したって私は死ねない。

脳を潰そうと何度も試みたけどいつも駄目だった。

自然と力が出てきて私を守る。

私はこの血に苦しめられて生かされてる。

「このまま寝よう。そして朝日を浴びてみようかな無理だらけど」

「おい、大丈夫か、おい、」

誰かに呼ばれている。

温かい体に抱かれている？

「おい、起きろ、おい、おい」

目の前には男の子。かつこいい。それが第一印象だった。

「大丈夫か、何があった」

「え？なにがですか？」

「なにがって、血だよ。血」

私の周りには血が波打つほど広がっていた。

血だらけの私を彼は抱きかかえてくれていたんだ。

「大丈夫ですこれぐらい。戻っておいで私の血」

血が心臓の傷口に戻ってきた。

「どう、驚いた？」

しかし彼は驚くこともなく私の傷口を触ってきた。

「大丈夫なんだな。よかった」

「！！」

飛び退いて彼から離れた。なんなのこの人間。普通じゃない。どうして逃げないの。

「どうした。どこか痛いところでもあるのか」

嫌だ。来ないで、来ないで、それ以上私に近づかないで。

「いや、いやあああああ」

「お、おい」

話しかけないで、近づかないで、私に触れないで、私に……

優しくしないで！

血の匂いがする。私のじゃない。

彼は手から血を流していた。

「大丈夫か、立てるか？」

差し伸べられた手からは血が出ていた。

「手、どうしたのですか？」

「ガラスで、ね」

私の心臓に刺さっていたガラスを……

「ありがとうございます。あの、……貴方のお名前は」

「聖弥、南海堂聖弥。君は？」

私の名前？ええと、何だっけ？この国での名前は……ええと……
いいや、昨日のやつ貰っちゃえ。

「夢、神原夢」

「夢、立てるかい？」

「はい」

聖弥の手はぬるぬるしているけど暖かくてとても優しい。

暖かくて、

優しくて、

私の初恋なのかな。これ

「聖弥、あのね」

「どうしたんだ。どこか痛いのか」

「そうじゃないの、あのね聖弥、私のことどう思う」

何言ってるの私、駄目、そんなこと聞いたら。

「可愛いと思うよ」

「本当、変だと思わない」

「変じゃないと思うよ」

「変だよ。さっきの見たでしょ。どう見たって人間じゃないじゃない
い」

そうだよ、私は彼とは違うんだから、化け物なんだから。

「夢が変なのかどうかは僕が決めること、誰がなんと言おうと夢は
可愛い普通の女の子だよ」

普通？

駄目だ、私、また、後悔する。

「でも、私……」

「あーあーあー、なんと言おうとも夢は可愛い普通の女の子だ」
それ以上、優しい言葉をかけないで、

私を蔑んで、

私に脅えて、

私から逃げて……

「これを見ても」

自分の右目をくりぬいて見せた。

それでも聖弥は抱き付いてきた。

「それでもまだ！夢は普通の女の子だから、自分で自分を傷つけるようなことするな。言うな！」

「いや、離れて、離して！」

鋭い爪で聖弥の頬や肩を切り裂いた。それでも離れない。

「離れない。夢を一人にすると間違ったことしか考えないから」

「あ、あ、あああああ」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

聖弥が、聖弥が……好きになってくる。

殺したくない。聖弥は殺したくない。
でも、……

食べたい。

「聖弥、ごめんね。痛かった？」

聖弥の頬を優しく舐めた。これまでにない刺激が舌を走った。

「夢、僕は君を信じるよ」

そのまま聖弥を押し倒した。

私の血が聖弥を包んでいった。

「聖弥……好き。それとありがとう」

聖弥の血を舐め取り聖弥の味が口で中一杯になった。

「夢、……好きだ」

いざ噛み付こうとした私を聖弥の一言が止めた。

「私も好きだよ」

「信じてるよ夢」

痛い、頭が痛い。駄目だ。聖弥は駄目なんだ。
食べたい。この味、今私は空腹なんだ。
駄目、食べちゃ駄目、また後悔するだけ。
食べなきゃ生きていけないんだよ。
だけど、聖弥は駄目。
なにが違うの？どれも一緒でしょ。
違う、聖弥は私を普通だって言ってくれた。
だから？食べちゃえば一緒じゃない。
聖弥は…聖弥は……

「夢……」

頭を引っ張られてキスされた。
「もういいよ。無理しないで。そして、泣かないで」

私の両手には聖弥の命がある。
美味しいよ。聖弥。
残さず食べるからね。

最後の目をしゃぶりながら朝日を見ていた。
やっぱり死ねないや。
「でも、もういいんだよ」

「聖弥、今年でもう何年だろうね。50年だっけ、私全然年取らな

「いんだよ、可笑しいよね」

「ママー、お腹空いた」

「はいはい、それじゃいきましようか。パパにバイバイは？」
「パパアバイバイ」

この国で一番美しい花を咲かせている木に手を振って帰る。

純粋なヴァンパイアは私で最後。

私の子は普通の子だから。

血を吸って満腹になる可愛い普通の女の子だから。

この国には春になると咲く赤く美しい花で一杯になった。

(後書き)

どうだったでしょうか？

自分的にはもう少しきつい表現を増やしたかったし

深い関係を書きたかったのですが難しく……

感想、評価、別のお話の要望などがあったらお便りください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF 小説ネット発足にあたって

PDF 小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF 小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147d/>

演劇 I F ストーリー 赤い花を咲かせる木

2009年3月24日09時38分発行